

被災地からのメッセージ

東日本大震災被災地への支援活動を活発に行っている森永宏喜先生（コムネット会員・千葉県鋸南町開業）に、津波で大きな被害を受けた被災地の現状と、松本歯科大の研究生生活から宮城県雄勝町に移住して診療を続けている歯科医師の河瀬先生を訪問したレポートをお寄せいただきました。



宮城・雄勝歯科診療所 河瀬先生を訪ねて

千葉県鋸南町 森永歯科医院 森永 宏喜先生

●はじめに

震災から1年9カ月が過ぎ、「記憶の風化」が叫ばれて久しい。

確かに力強く復興してきている局面もある。だが今だに支援が必要な状況が数多くあるにも関わらずメディアなどの報道は大きく減りつつあり、多くの被災地・被災者の皆さんにとって厳しい冬となっている。

そのような状況の中、筆者は少しでも関心を保つことに役立てばと思い各種媒体での情報発信、投稿、チャリティ講演会の運営、各種会合での視察報告などをさせて頂いてきた。その一部はこれまで「Together」にも寄稿させて頂いている。

今回の被災地行では、災害救護診療に参加されたのがきっかけで大学での研究生生活から転身、被災地に飛び込み歯科診療所長となられた河瀬聡一郎先生を石巻市雄勝地区にお訪ねした。あわせて周辺地域の状況についてもお報告する。いくらかでも読者諸兄の参考になればと思う。

●大川小学校の惨事

10月23日早朝、千葉県・南房総の自宅から車に乗り込む。同乗するのはコーディネータとして共に働く妻・玲子と歯科衛生士の野口、医院受付兼IT担当の和田。玲子は仙台出身で震災直後の災害救護診療に参加したこともあり被災地の経験は豊富だが、和田と野口は東北地方は初めて。少し不安な面持ちだ。

4人を乗せた車は高速を順調に北上していったが、福島県に入ると「震災本復旧工事」の渋滞が。高速道路の規格をクリアするための本格補修で、工期は24年末まで要するとのこと。

三陸自動車道・河北ICで高速を降り、北上川を左に見ながら河口に向けて下る。川の土手沿いの県道には多くの車や作業員の姿が。路肩の補修やなぎ倒されたガードレールの設置がやっと進んできたという印象だ。最初の目的地、石巻市立大川小学校はもうすぐである。

大川小は北上川の河口から4キロ上流に位置するが、想定外の大津波で65名の児童・教職員が死亡、19名が行方不明という大惨事となった。避難誘導をめぐる市教委の説明が二転三転し、「なぜ多数の児童が犠牲となってしまったのか」という真相ははまだ未解明で、ご遺族の心情は宙に浮いたままである。

車を校舎脇に停め、ご遺族が建立した慰霊塔に近づく。供えられる花束は今も絶えることがない。眼前には瓦礫と化した校舎が横たわっている。分厚い鉄筋コンクリートがここまで破壊される津波の力に圧倒される。場所により内部が比較的無事な箇所もあり、教室内のイスや机、壁に掲げられた標語などがそのまま「本当に直前まで日常の学校生活があったのだ」ということが実感され痛々しい。

この状況を肌で感じる唯一の方法はその場に身を置くこと。フレームで切り取られた画像や動画では決して伝わるものではない。

●廃墟の石巻市雄勝町

ご遺族と思しき初老の男性が車から降り、線香の束に火を点けるのを見て、私たちは大川小を出発した。次の目的地、雄勝地区はここから南東にひと山越えたところだ。

宮城県・牡鹿半島の付け根から少し北部に位置する石巻市



大川小学校の校舎前に建立された慰霊塔と供えられた花と供物

雄勝町。太平洋が山に深く切り込んだ雄勝湾は三陸海岸南部の典型的な地形である。名産の雄勝スレート（粘板岩）は10月に原状復帰した東京駅の屋根材にも使われ、硯（すずり）は全国有数の知名度であった。

高さ18mに達したと言われる津波で地区は壊滅、250名近い死者・行方不明者を出した。被災前4千人を超えていた人口は仮設住宅に散るなどして千人程度にまで激減、今も戻っていない。

坂を下ってゆくと視界が開け、雄勝の中心部に出る。道の右側に雑草が生い茂った広大な更地と、その向こうに廃墟の鉄筋コンクリートの建造物群が見えてきた。住宅の基礎の撤去はある程度進んだらしく、雑草の間に見え隠れしているものは少ない。再建されたものは内陸部から電気・電話を引くための電柱が唯一といい。

道のすぐ傍らに高さ10mほどの瓦礫の山が2つ積まれていて、その頂から重機がこちらを見下ろしている。5月にここを訪れた時はこの山はずっと高く大きく、4ヶ月を経て撤去作業は着実に進みつつあるのが判る。

雄勝湾の最も奥まった部分から北岸を進む。商店や住宅、銀行や郵便局などが立ち並んでいたエリアだが木造の建物は全て流され、その瓦礫も撤去されて小高い山の麓まで視界を遮るものはほとんどない。さらに走ると市立雄勝病院の廃墟が左手に見えてくる。

雄勝病院は海岸沿いに位置する3階建てだったが屋上まで津波に襲われ、多くの入院患者さんや職員の皆さんが亡くなられた。他の民間医療機関も流失したため、雄勝地区の地域医療は全て失われることになった。

医療の空白地帯となった状況を脱すべく、昨年10月に雄勝診療所が設置されたのに続き、今年6月に開院した歯科診療所に着任したのが河瀬総一郎先生だった。

●河瀬先生を訪ねて

次第に海岸から離れ高度を上げていくと、道の山側に狭い平地が点在している。現在利用できるまとまった平地は付近に無く、各種施設はこのようなこま切れの狭い敷地を利用せ



雄勝地区。瓦礫の撤去は進んできたが、それ以上の進展はない



津波に襲われた雄勝病院の廃墟

ざるを得ない。雄勝診療所と、隣接する歯科診療所もこのような立地にある。

まだ新しいプレハブのドアを開けると待合室。その奥のカウンター越しにスタッフの方と目が合う。「すみません、千葉から参りました森永と申しますが」と話しかけると「あ、はい！お待ちしてました」との明るい声。そして振り向き「先生、みえましたよ！」と奥に声をかけた。

「遠いところわざわざ有難うございます」

診療室の奥から河瀬先生がゆっくりと歩み寄ってくる。若々しく、包容力にあふれた優しい笑顔だった。

松本歯科大学の障害者歯科講座の講師をされていた河瀬先生は、気仙沼、南三陸、石巻の各地に展開した大学医療支援チームのリーダーを務めた。18日間で73の避難所や7ヶ所の障害者施設を訪問、被災直後の緊急処置から、長引く避難所生活で甘いお菓子を無制限に与えられる子ども達へのう触予防処置、高齢者の誤嚥性肺炎防止のための口腔ケアまで、活動は多岐にわたったという。

大学チームが撤退した後も個人での支援を続けていた先生は今年3月、石巻市が開設予定の雄勝歯科診療所長の公募を知ることになる。

「千年に一度の大災害に立ち会った者として『関わらない』という選択は出来ませんでした」

「大学での研究生活からこの環境の変化、不安はなかったですか？」

私の質問に先生はうなずいて、

「私の唯一の不安は、この土地の皆さんに受け入れて頂けるだろうかということでした。私はよそ者ですし、義歯を外した患者さんが土地の言葉で話すと彼女たちの通訳が必要なのです。ポロシャツで診療しているのも、この方が親しみやすいのではと思ったからです」

といって歯科衛生士の渡邊さんに視線を向けた。彼女はご主人の家業である養殖業を手伝っていて20年のブランクがあったが、この診療所が出来たのを機会に衛生士として復帰した方だ。

「先生が来て下さって、みんな喜んでますよ。患者さんにとても優しく接して下さるし。ここが出来るまでは本当に不便でしたしね」

明るく力強い声にアシスタント・受付の杉山さん、松田さんもうなずく。

「先生はこの間、私たち3人を車に乗せて長野旅行に連れて行って下さったんですよ」

「先生が眠くなるといけなから、私たち3人でずーっとおしゃべりを続けてました」

いやー大変でした、と苦笑する河瀬先生にニコニコと笑いかけるスタッフの皆さんを見てると、こちらも温かい気分になってくる。3人のうちお2人はまだ仮設住宅から通勤されていて何かと不自由だろうが、雰囲気はとても明るい。

「困ることといえば、口腔領域の疾患で入院を要する方をお願い出来る施設が、現状では仙台まで行かないと無いのです。ここから仙台はやはり気軽な距離ではありません」

「先生いますか？」

待合室から声がした。入ってきたのは隣接する医科診療所の小倉健一郎先生だ。

「市の担当者がこれを持って来たよ」

といって見せて下さったのは新築計画がスタートした新生雄勝病院の見取り図。

「まずは間取りとか設備とか意向を聴きたいということでした。もちろんまだ全く白紙なので要望をしっかりと出しましょうね」

時間が瞬く間に過ぎていった。その後小倉先生の医科診療所も見学させて頂くともう失礼する時刻だ。

「また伺います。皆さんで千葉にもいらして下さいね」

「じゃあ先生、長野の次は千葉ですね！楽しみだなあ」

賑やかな笑いにつつまれつつ私たちは雄勝を後にした。

●課題多い復興への道

雄勝の歯科医療は復興に向けて力強い一歩を踏み出した。雄勝地区にとってこの歯科診療所とスタッフの皆様、そして



向かって左手のプレハブが雄勝歯科診療所。右手は医科診療所

河瀬先生を得たことはまさに僥倖といえよう。だが地区全体の復興というはまだ不透明な部分が少なくない。河瀬先生は言う。

「高台移転の説明会が開かれつつありますが、建設される復興住宅に入る経済力が地区の皆さん全員にあるとは限りません。特に高齢者の皆さんは仮設を出たら行くところがないのが現状です」

これは雄勝地区に限ったことではない。また沿岸部の小さな町村と、石巻・仙台などの広域の都市圏では全く事情が異なり「被災地内での復興格差」などが表面化しつつあると聞く。このあたりの詳細については紙面の制約もあり別の機会にゆずりたい。

最後までお読み下さった皆様には、各種の被災地ツアーでも全く結構なので現地を是非ご訪問頂き、そこに暮らす方々と接して頂ければと思います。今だからこそ被災地の空気に触れ、実感して頂くことで始まるものが必ずあると確信しているからです。

(森永)

●森永 宏喜先生のフェイスブック・ブログはこちら



フェイスブック

<http://www.facebook.com/morinagadc>



ブログ

<http://blog.livedoor.jp/morinagadc/>



ユニットの1台はストレッチャーでの導入・障害者歯科に対応



河瀬先生(前列中央)とスタッフの皆様(後列)と共に